

出國報告

(出國類別：參與具公務性質之會議)

日本犯罪心理學會第 54 回大會

服務機關：國立中正大學犯罪防治系

姓名職稱：戴仲峰 副教授

派赴國家：日本

出國期間：中華民國 105 年 9 月 2 日至 5 日

報告日期：中華民國 105 年 9 月 20 日

摘要

本次參加日本犯罪心理學會第 54 次大會暨論文發表會之主要目的為：9 月 4 日下午 14:30-15:30，代表中正大學參與由該會所舉辦之論文發表，發表組別為「各種犯罪、犯罪者、非行、犯罪觀」小組，於學會承辦學校：位於東京都文京區之東洋大學五號館 5303 講義室，發表編號為 p2-16。為了能夠與更多學者進行意見交換以及交流，本次的發表採用海報形式，發表時間較長，會場提問踴躍。發表順利完成，並與多名學者（北海道大學、山梨英和大學、大阪大學、甲南女子大學、近畿大學）以及日本法務監所實務界專家（福島刑務所所長、宮城縣科學警察研究所研究員）提問交流，會後並針對中華民國以及中正大學之犯罪防治議題進行合同研究平台以及未來共同進行學術發表等創建可能性（磐城 IBARAKI 大學受害者學研究所）評估，成果豐碩。

目次	
封面	1
摘要	2
目次	3
本文 目的	4
過程	5
心得與建議	5
附件一 與社會排斥 (social exclusion) 有關之攻擊行為及其影響因素	
發表論文全文 (日文說明部分)	8
附件二 「與社會排斥 (social exclusion) 有關之攻擊行為及其影響因素	
發表論文全文 (英文海報部分)	10
附件三 照片	11

本文

目的

「日本犯罪心理學會」為日本針對犯罪心理學以及犯罪領域實務問題所設立之國際性綜合學會。與日本其他心理學會不同，日本犯罪心理學會並非隸屬於日本心理學會下轄，而是直接設立，具有犯罪心理研究之超然性。日本犯罪心理學會創立於 1947 年，在多年耕耘下，日本心理學會已經成長為會員數接近 8000 人，其會員出身涵蓋學界（法律學、心理學、臨床心理學、犯罪學、犯罪社會學、社會工作學、社會福祉學、醫學、警察學等各專業學術研究人員或大學教授）、法學實務界（法官、檢察官、各級法院事務官、刑務所法務技官、鑑別所法務技官、保護設施法務技官）、社會福祉及厚生福利實務界（保養機構、戒治中心）。此外更特殊的為，日本犯罪心理學會成員中有許多來自於「日本科學警察研究所」以及「日本各地方政府科學警察研究機構」，此兩類機構在中華民國並未設立，主要乃針對警察於辦案或是鑑識方面的科學化養成以及精進破案技巧、掌握最新破案科技、國際刑案交流等工作為主。堪稱為日本國內最為菁英的警察最前端辦案人員以及研究員。

職於 2001 年自日本留學，就讀日本東北大學以來，本著學術本位發表的立場，連續 15 年參加日本犯罪心理學會，並於大會發表個人著作論文，於本學會中已有深厚之耕耘基礎以及研究人脈聯結。

本次參與日本犯罪心理學年會第 54 回大會最主要之目的之一在發表職於本

學年度上半期之科技部計畫執行階段成果。職於 104 年度獲得科技部研究經費補助，研究主題為「「社會排斥」的社會心理學與腦神經科學實證研究 (104WFA1050264)」以實驗室操弄方式進行對於研究參與者在遭受到團體成員 (研究同謀者) 之排斥後，是否會出現攻擊行為 (時技工及行為、情緒攻擊行為、社會評價攻擊行為) 以及影響這些攻擊行為強弱或是發生與否的人格以及個人背景變項因素。本次參與學會主要以「與社會排斥 (social exclusion) 有關之攻擊行為及其影響因素 (社会排斥に関する攻撃行動およびその影響要因)」為題目，進行一小時之日文口頭海報論文發表，並參加發表論文組之會後討論會議。本次發表所張貼之海報為了忠實呈現社會排斥在美國由 Twenge 團隊之設計，以及方便國際化之交流，故以英文方式進行呈現，但現場亦輔以日文摘要以及說明之發放，以利與日本學者進行交流。會中與日本學者進行熱烈討論以及意見交換，亦能夠知道日本在相關實驗設計上之操作經驗。其中日本學者更提到以社會排斥之研究結果，能夠適度的作為日本地區頻發的「隨機殺人」現象進行加害者的動機分析，此部分的研究延伸，將成為未來職進行相關研究時的重要參考。

過程及心得

本次參與學會發表過程順利，職於 2016 年 5 月 15 日前先完成網路報名，並於 6 月 18 日取得發表許可以及邀請函後開始準備本次的發表，並於 8 月 11 日前將發表論文全文 (如附件一)，以電子信件方式寄至日本犯罪心理學會論文發表審核部完成所有程序。赴日後，職於預定發表時間地點完成發表，並於會場與多國人士交流，成果豐碩。

本次會議之會議議程十分豐富，從犯罪心理學之實務發展、心理學犯罪領域的應用、犯罪與心理學之對話、心理學與犯罪問題在實務層面之發展與應用、

心理問題對於犯罪判決影響之應用及解釋，重點在於結合心理學以及犯罪之領域，企圖從犯罪人之心理狀態解釋其犯行當下之行為模式。其論點接近理性行為選擇模式。此外，本會議亦重視犯罪地域與犯罪心理之結合與討論、心理學與犯罪領域議題之討論與分享、心理學之腦神經科學部分與人類行為在犯罪領域之行為研究規劃之妥善性因應策略分析及策進、犯罪與社會之神經生理對犯罪心理之人類行為科學與國家安全之隨機殺人，主要探討方向為透過犯罪人心理狀態之掌握，是否能夠有效的監控並且預測犯罪行為的發生。最後則以社會心理學中的粉紅色眼鏡效應之分享與實務經驗分享體驗探討與實境影像應用之企業性發展傳播，主要希望能夠將社會心理學現象與犯罪人之心理進行結合，並且探討實境影像在犯罪偵察以及犯罪人心理剖繪之實務運用。

議場主題包羅萬象，其主要研討主題除了集中於犯罪心理學相關研究領域議題之外，同時也針對犯罪心理學在犯罪學領域之實務性對話以及檢討、法律實務與犯罪之結合與嚴懲性司法體系之建立與修正之修復式正義以及相對性正義嚴格演進之歷史軌跡以及，犯罪人人際能力之友情歷程與依附關係之愛情分享與親密暴力之家庭暴力 DV 殺傷事件之分析與隨機殺人之相關及差異分析比較、並從 SEM 觀點之結構方程式模型探討不同變項對於結構方程式之影響以及分析其中之說明力模型以及解釋力模型之探討運用。

本次會議所獲得之心得主要乃集中於犯罪心理與嚴懲性司法體系之建立、犯罪心理學在犯罪學領域之實務性對話以及檢討、隨機殺人與粉紅色眼鏡效應之

分享與實務經驗探討，並從寶可夢之流行探討犯罪情境之安全領域性認知以及危險情感投射之假想環境關係認知態度理論投射應用，心得豐碩且紮實。

另外，本次會議於會場獲得之新知以及分享，主要乃以犯罪心理之日本實務運用以及監禁對於長期受刑人之生心理狀態影響，以及從全人生觀點盡力對於短中長期受刑人之生涯藍圖規劃與一般人之生涯藍圖之基因比較，依附關係對於成人其愛情依附之負面影響，隨機殺人從恐怖情人觀點出發之議題為主。並且獲得相關學界研究者以及實務專家之討論以及研究首肯，獲得豐富收穫。同時與薊城大學副校長小柳武先生以及東洋大學犯罪防治系所長桐生正幸建立良好通暢之溝通管道，對於日後之共同研究以及跨國家地區性之研究進展將有莫大助益。

心得與建議

中華民國與日本，一水帶隔，如唇如齒，寒暖相依。尤以現下中華民國學術界著重歐羅巴洲以及美利堅洲，凡以歐羅巴洲以及美利堅洲為師，證諸學說論點，皆以西方歐羅巴洲與美利堅洲為上。然，日本與中華民國根源於儒家文化，人民心理素質亦近，社會問題狀況亦如手足翻版，故以有效引入日本學術研究做為中華民國他山之石，方可收廣收智識、兼容並蓄之效。

本次論文發表後之心得及建議，乃建議未來可加強與日本方面之交流，建立犯罪心理研究合同研究平台，廣泛進行學生以及教授之交流，定期發表泛東方文化之犯罪心理議題論文，藉以提高中華民國以及日本之研究學術水準，分享彼此資源，以收更為傑出之研究綜效。

發表論文全文（日文説明部分）

社会的排除（social exclusion）に関する攻撃行動およびその影響要因

○*戴伸峰

*（台湾国立中正大学犯罪抑制学科）

問題と目的 今まで社会安全や治安に対し、自信を持ってきた台湾社会を震撼させた殺人事件が多発している。2年前の地下鉄無差別殺人事件など、無関係の被害者に対する殺傷事件がすでに4件発生した。その中に、今年3月発生した4歳の女子を包丁で襲い、首を切断した殺人事件が台湾社会に未曾有の衝撃を与えた。こうした無差別殺人事件では、加害者は被害者と面識がないため、恨みや復讐などの動機による犯罪行為とは考え難い。しかし、逮捕後の調べに対し、彼らは「別に被害者に対する恨みがないが、私は社会に見捨てられ、社会の敗者とみられる。弱いものを選んだのは自分の犯行が遂行しやすいため」と供述した。彼らの話によると、これは「社会的排除」による犯罪ではないかと考えられる。社会的排除（social exclusion）とは個人または団体が何らかの原因で、社会や他の団体から排除または疎外される状態である。先行研究によると、社会や団体から排除されたことが個人に対し、様々な悪影響を与え、問題行動を引き起こすことが確認された（Twenge et al., 2001, 2003, 2011）。その中、最も危険な行動は無関係の第三者に対する攻撃行動である（Oikawa, Kumagai, & Ohbuchi(2004)。こうした社会的排除が個人の攻撃行動に及ぼす影響について、先行研究では社会心理学的実験を設け、検討を試みた（Twenge et al., 2011）。本研究では共同作業メンバー選択法（Twenge et al., 2001）を参考し、実験室で社会的排除の状況を操作し、被験者の反応行動を分析することが目的とする。

研究方法

実験室による社会心理学的実験

参加者 本研究では大学生を対象に社会心理学的実験を通じ、被験者を社会的排除を経験させたことである。参加者はすべて台湾国立中正大学の在籍学部生であり、実験操作の手順により、ランダムで社会的排除組と社会的包摂組の両組に分け、それぞれ男性、女性30名で、合計120名の被験者のデータを集めた。

実験室の配置 実験室は同大学構内である実験室を利用し、待合室（図1）と実験室（図

2）を設けた。



図1 待合室

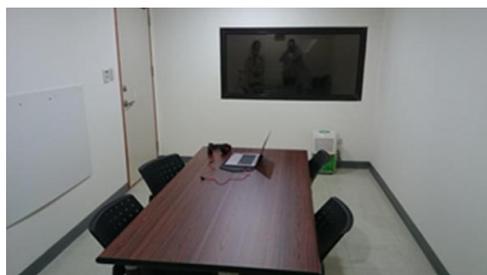


図2 実験室

共同作業メンバー選択法

社会的排除とは、団体や他人から排除されている状態と定義し、我々はTwenge et al. (2001)の共同作業メンバー選択法を参考し、次の手順のように、被験者に対する社会的排除の状況を作り出した（図3）。まず、被験者とほかの面識がない3人被験者（サクラ）と一緒に待合室で、人格や日常行動に関する質問紙を回答させた。その後、研究者は被験者とサクラに「これから自分と一緒に次の共同作業段階に入ってほしい人を指名してください」と指示した。その後、ランダムで被験者を社会的排除組と社会的包摂組に分け、社会的排除組の被験者に「ほかの3人は誰もあなたを共同作業メンバーとして認めないから、これからの共同作業段階で、独自で作業しなければいけません。」と告げ、社会的排除を経験させた。一方、社会的包摂組の被験者には「あなたはほかの3人から共同作業メンバーに選ばれ、これからの共同作業段階で一緒に作業する」と告知し、社会的包摂を経験させた。

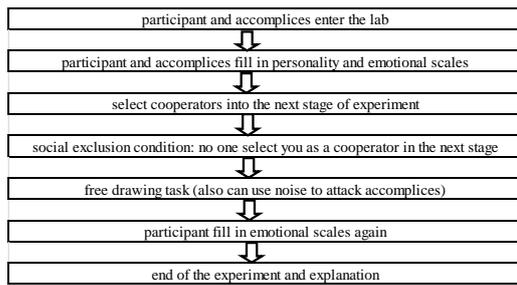


図3 共同作業メンバー選択法の流れ

その後、被験者は自分の情緒とサクラに対する感想に関する質問紙を回答し、第2段階の実験に入った。第2段階では、架空のサクラに対し被験者はノイズで彼らの描画作業を妨害すること（ノイズ攻撃）ができると告げられた。研究者はパソコンで、被験者がサクラに対する攻撃行動を記録し、分析する。一方、社会的排除の前と後に被験者に、サクラが作成した絵を被験者に提示し、採点を求め、この採点も攻撃行動（評価攻撃）として分析する。

研究結果

社会的排除の効果に関する認知について 被験者が実際に自分が社会的に排除されたかどうかを確認するため、「私はほかの三人から排除されたと感じていた」の9件法評定の項目に対し、被験者に答えを求めた。排除前と排除後の平均値差異は有意であった ($t(58) = -6.73, p < .01, M = 2.80, 4.41$)、被験者らは自分自身がほかの三人のサクラから排除されたことを感じたことを確認した。

情緒的な攻撃行動について 情緒的な攻撃行動とはほかの三人のサクラや実験に対する感想に関する9件法評定の項目であり、被験者は社会的排除を経験した後、「ほかの三人のサクラは私のことが好き」に対し、有意な差異が見られ ($t(58) = 4.40, p < .01, M = 5.07, 4.47$)、やはり相手からの好意の認知が下がった。しかし、ほかの三人のサクラの評価に対し、被験者は社会的排除を経験した後、サクラの能力に関する評価、絵の完成度に関する評価がすべて有意に高くなった ($t(58) = -2.36, -2.10, p < .05; M = 5.81, 6.19; M = 5.85, 6.19$)。また、サクラから敵意を感じたと関わらず、サクラに好意を持っているかという項目に対し、被験

者は社会的排除を経験した後、サクラに対する好意が有意に上昇したことが明らかになった ($t(58) = -2.52, M = 5.08, 5.47$)。

評価攻撃について 我々は被験者に「サクラが描いた絵に点数を付けよう」と指示し、社会的排除経験前後の点数を評価攻撃とし比較したところ、図4に示すように、すべてのサクラが描いた絵に対し、被験者の評価が有意に下げたことが明らかになった。

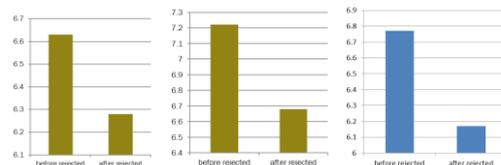


図4 被験者の評価攻撃

ノイズ攻撃について 最後に、被験者がノイズを利用しサクラの作業を妨害するノイズ攻撃について、55%の被験者はノイズを利用したことが明らかになった。ノイズを利用した被験者の中に、90%は軽度のノイズから選んだのに対し、10%の被験者は最初の攻撃から重度のノイズを選んだ。ノイズ攻撃を利用した被験者は5分間の作業時間のうち、平均32秒のノイズを架空のサクラに与え、最も長かったのは2分45秒であった。

考察 本研究では、社会心理学的実験で被験者に社会的排除を体験させ、彼らの攻撃行動を分析することが目的とする。先行研究と同様に、社会的排除を経験した被験者はサクラに様々な手法（情緒的、実際行為）により攻撃をかけたことが明らかになった。しかし、本研究では被験者が社会的排除を経験した後でもサクラに対する好意や評価が上昇するという矛盾な結果が見られた。それは被験者の社会的包摂に関するモチベーションが高揚することの影響と説明を試みた。即ち、被験者はサクラに対する情緒的な敵意を表明すると、お互いの将来の協力チャンスを妨害すると

附件二 「與社會排斥 (social exclusion) 有關之攻擊行為及其影響因素

發表論文全文 (英文海報部分)

Social Exclusion : The Experiments on the impacts of exclusion towards emotions and behaviors

*Tai Shien-feng, Associate Professor, National Chung Cheng University, Taiwan

Social Exclusion : The Experiments on the impacts of exclusion towards emotions and behaviors

*Tai Shien-feng
Associate Professor
National Chung Cheng University
Taiwan

Social Exclusion

- Social exclusion is a multidimensional process of progressive social disorganization, interrupts groups and individuals from social relationships and preventing them from full participation in the normal, normatively activities of groups.
- In many ways, social exclusion means that someone will be alone, and will not be allowed to belong any group.

Summary of Results of Laboratory Studies of Social Exclusion

Project dependent variables	Effect of Exclusion
Aggression	Starting unpleasant noise, negative job evaluation
Prosocial behavior	Drawing less money, relinquishing less time, not cooperating in game
Self-defeating behavior	Early to stop class, choice of unhealthy behaviors
Cognitive performance	Poor performance on IQ test, GRE reading comprehension
Individual differences	Threatened leads to aggression
Blood and emotion	Anxiety, sad, but no real effects on explicit measures

Summary of the Experiment Process of Social Exclusion in Laboratory

- The method of nominating the cooperators (experiment 4 and 5 of Twenge, Baumeister, Tice, and Stucke, 2001).
- The method of future outcomes manipulating by personality testing (Twenge et al., 2004).
- The method of social exclusion issue (Tai et al., 2015).

The Present Study

- By using the experiment modified from Twenge, Baumeister, Tice, and Stucke(2001), we asked participants to do a 2-stage task with another 3 accomplices.
- The process of the present experiment was as follow.

The Process of the Experiment

```

graph TD
    A[participants and accomplices enter the lab] --> B[participant and accomplices fill in personality and emotional scales]
    B --> C[select cooperators for the next stage of experiment]
    C --> D[social exclusion condition: no one select you as a cooperator in the next stage]
    D --> E[free drawing task (after you get notice to attack accomplices)]
    E --> F[participants fill in psychological scales again]
    F --> G[end of the experiment and evaluation]
    
```

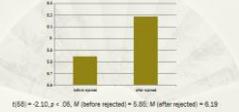
The Laboratory Setting



- Seat with computer is for the participant.
- The other seats are for 3 accomplices.
- Computer will not be set until the exclusion operation finished.

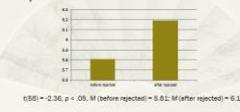
Results (the emotional level)

- The drawing ability of accomplices



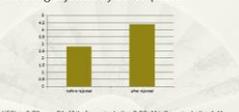
1590 = -2.10, p < .05, M (before rejected) = 5.86; M (after rejected) = 6.19

- The performance of accomplices in this experiment



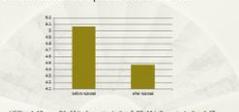
1590 = -2.36, p < .05, M (before rejected) = 5.61; M (after rejected) = 6.19

- I felt being rejected by accomplices



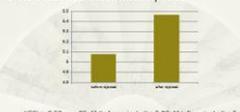
1590 = -6.73, p < .01, M (before rejected) = 2.80; M (after rejected) = 4.41

- I think that accomplices like me or not



1590 = 4.40, p < .01, M (before rejected) = 5.07; M (after rejected) = 4.47

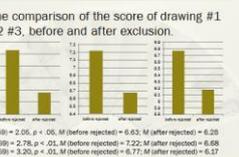
- How do I like other accomplices



1590 = -2.62, p < .05, M (before rejected) = 5.06; M (after rejected) = 5.47

Results (the behavioral level)

- The comparison of the score of drawing #1 #2 #3, before and after exclusion



1590 = -2.05, p < .05, M (before rejected) = 6.63; M (after rejected) = 6.28
 1590 = -2.78, p < .01, M (before rejected) = 7.22; M (after rejected) = 6.68
 1590 = -3.20, p < .01, M (before rejected) = 6.77; M (after rejected) = 6.17

- The noise attack
- There were 33 participants (55% of total samples) using the noise button to "attack" accomplices.
- 30 (90%) participants who attacked accomplices selected mild attack (less than level 5) at their first attack. 3 (10%) used severe attack.

- 17 (51%) participants who attacked accomplices continued their first attack less than 0.5 sec, and the other 16 (49%) continued to attack their accomplices more than 0.5 sec. The longest duration of first attack was 10.8 sec.

Discussion

- The present study used the experiment modified from Twenge, Baumeister, Tice, and Stucke(2001), and we asked participants to do a 2-stage task with another 3 accomplices.
- Participants were rejected by the other accomplices to be a cooperator in the second stage of the experiment.

- Participants being rejected felt that they were rejected strongly, and felt that accomplices did not like them.
- On the other hand, participants evaluated accomplices as competent, had good performances, and had positive feeling toward accomplices.
- It showed contradictive emotional reaction of participants after being social exclusion.

- Participants used not only scoring but also noise to attack accomplices who rejected them.



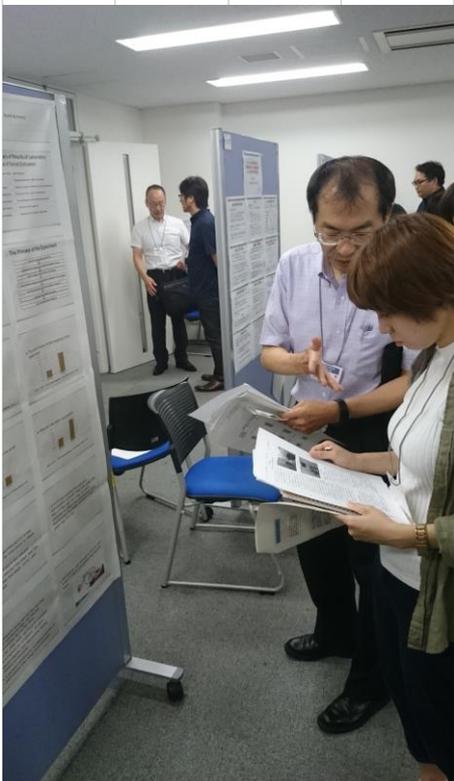
附件三 會場發表照片



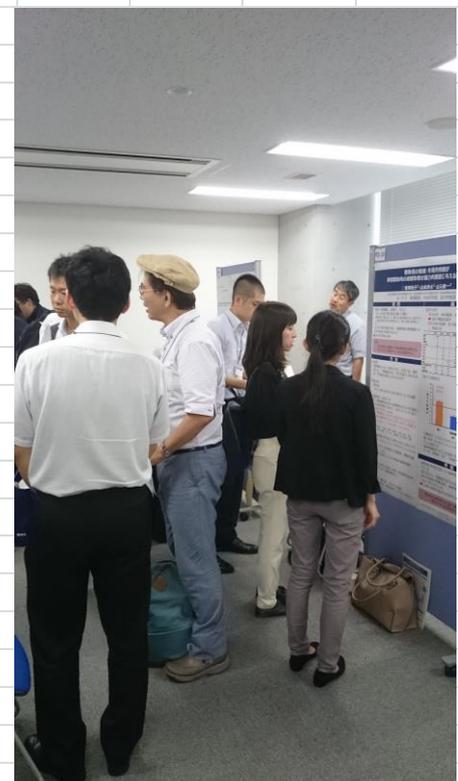
職於會場海報前



職於發表海報前



日本學者與職進行討論



發表會場討論熱烈